

エレミヤ書31章から : 祝福し合うこと

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、
見えない事実を確認することです。ヘブル 11:1

4月7日、主日礼拝の聖書箇所は、エレミヤ書31章。1節から40節まで続く希望に満ちた御言葉一節一節に聞き入りながら、それらの御言葉の流れの底に、このヘブル書11章1節の御言葉が音も立てず流れているのを感じていた。31章だけではない、おそらく聖書のどこを読んでもこの御言葉は静かに、一番深いところを流れている。そして、このような信仰にすがりつつ聖書を読むとき、御言葉の一つ一つが現実のできごと以上に深い喜びとなり、力となるのを知るのである。

「そのときには、と主は言われる。」エレミヤ 31-1

そのときがある、必ずある、と思うと何とも言えない喜びがこみ上げてくる。旧約聖書に記される代表的な「そのとき」は、エジプトで奴隷であったイスラエルの民が、指導者として立てられたモーセによって、約束の地に導き上られたとき。それから1000年近く後、神に背き続けてついに捕囚の身となったイスラエルの人々を、その追いやられた国々から再び約束の地に導き上られたとき。

聖書全編を貫いている、なくてはならぬときがある。罪によって囚われの身となっている私たちを救うため、イエス・キリストがこの地上に人として来られたそのとき。再びこの地上に来られて、人と宇宙万物を完成されるそのとき。

「初めに、神は天地を創造された。」で始まる聖書は、『然り、わたしはすぐに来る。』アメン、主イエスよ、来てください」と、キリスト再臨の約束と待望によって終わっている。幼子のように、そのときを信じて待っていよう。だが、決して強くない、すぐに間違ってしまう、弱い弱い者だから、「主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように」という聖霊の祈りに支えられて、みなと共に祈り合いながら守られていよう。

「遠くから、主はわたしに現れた。

わたしは、とこしえの愛をもってあなたを愛し、

変わることなく慈しみを注ぐ」 31-3

この有名な御言葉は、ここだけ取り出して用いられることも多い。しかし、これがエレミヤの歩んだ苦難の時代に、絶望的な状況にあって語られた神の言葉であることを知るとき、御言葉こそ闇を照らす光であると、改めて迫ってくるのを覚える。2 節には、この神との出会いを「荒れ野で恵みを受ける」と記されているが、荒れ野とは、人間的な希望の絶えたところであろう。私たちがこの世に望みをおき、まだ自分に頼っているかぎり「とこしえの愛をもって愛している」との御言葉を聞くことはできないかも知れない。しかし、神様に頼るほかない貧しさの中で、一心に「主よ」とすがるとき、無きに等しい者がこのままで、とこしえの愛をもって愛されているのを知るのである。

「見よ、わたしは彼らを北の国から連れ戻し、地の果てから呼び集める。その中には目の見えない人も、歩けない人も、身ごもっている女も、臨月の女も共にいる。彼らは大いなる会衆となって帰って来る」 31-8

なんという光景だろう。人の目にはとても無理だと思われる人々が、皆共に歩いて

帰ってくる。この世では、弱く力なき人はいつしか脱落する。でも、神様の備えてくださる道は、みんなで共に、賛美の声を響かせながら歩む道。かつて、苦悩の涙を流しながら歩いた道を、今は喜びの涙を流しながら歩いて来る。しかし、その回復への日々が決してたやすくはなかったことは次の御言葉が告げている。

「あなたはわたしを懲らしめ、わたしは馴らされて
いない子牛のように 懲らしめを受けました。
どうかわたしを立ち帰らせてください。」 31-18

かつて聞いたことがある。「少くらい神様から離れたって、いつでも立ち帰れると思っていた。でも、そんな甘いものじゃなかった。いざ神様に帰ろうと思っても、一度離れた神様との距離はどんなに焦っても、自分で埋めることはできなかった」と。人は、罪の重さを苦しみの重さによって知らされる時がある。何より苦しいのは、立ち帰ろうとして帰れない、内なる罪に囚われてしまっている時だろう。そのような時、私たちの祈りは「どうかわたしを立ち帰らせてください」という呻きにならざるを得ない。そうだった。私たちはみな、神から遠い存在なのだ。そんな者を神様のもとに連れ帰るためにこそ、イエス・キリストは十字架について罪を贖ってくださったのだ。今週一週間も、その十字架の愛を忘れず♪われはほこらん、ただ十字架を と、歌つつ歩むことができますように。

その日の午後、晴れる家の義母を訪ねた。「今日は朝から、食事の他はずっと眠っておられます」と言われ、やっと起こして車椅子に座らせ、何を聞いても「わからない」をくり返すだけ。お饅頭をあげても、甘いかどうかも「わからない」と答える。終いには

怒りの感情さえあらわにする義母を一人にできなくて、午後 4 時からの礼拝に私も共に参加させてもらった。「さあ、主を賛美しましょう」と、牧師夫妻の愛のこもった呼びかけをもって始まった礼拝、奏楽をしながら力いっぱい歌う婦人と、2、30人のページもめくれない人たちの間を回りながら「ここですよ」と優しく声をかけ続ける牧師。みな一生けん命歌おうとしている。義母はいつも大きな声で歌うのに、今日はなぜがハミング。歌詞は「わからない」らしいが、次々歌う全ての曲をハミングし続けた。そして、短い聖書のお話があって、最後に「では、いつものようにお互いを祝福しましょう。お隣の方に、前の方に、後ろの方にも、その横の方にも、5回『あなたに平安がありますように』と挨拶しましょう。」との牧師さんのかけ声で、それこそ一斉に「あなたに平安がありますように」の声が響きわたる。その時、なんと義母が私に向かって「あなたに平安がありますように」と、はっきりした言葉で言ってくれたのだ。共に手を取り合って喜んだのは言うまでもない。義母の清い笑顔が主の恵みを歌っているようだった。